

カナダで学ぶ日本からの留学生のESL学習様態について

山崎 純一*

はじめに

1992年の調査では1990年からの1年間に6,518人の学生が所属する学校主催のプログラムで海外の教育機関等に出向き研修などを受けているという報告がある(Iwakiri 1993)。最近では各大学や高校などが海外の教育機関と提携して独自に学生を留学させ、それぞれの機関での学習成果を読み替え単位として認めるようになった学校も増えているようだ。海外での語学研修の成果を具体的に検証した研究も多く見られるようになった。Yamane (1985)は、研修プログラム参加学生64名のスピーキング能力の伸びをpretestとposttestの結果によって検証し、プログラムの成果を報告している。Yamamoto (1992)によると、約1カ月間の語学研修プログラムの成果を、実験群(参加者30名)と統制群(pretestに35名, posttestに45人)による5種類のテスト結果から検証した。その結果、書き取りと読解のテストで群間に有意な差があったと報告している。また、Iwakiri (1993)は、205名(実験群:109名, 統制群:96名)の学生を対象に調査を行った結果、ListeningとStructureのテストで有意な差があったことを報告している。また、同時に行われた質問紙調査による結果で、研修に参加した学生達の間に、学習への積極的態度、自主性、英語に対する自信の増進がみられたと報告している。Kohro (2001)は、海外での学習経験者(実験群)と非経験者(統制群)間の英語作文(composition)能力の差異について検証した。Holistic, contentなど7項目のpretestとposttestのスコアには有意な差は検出されなかったが、t-unit lengthの値において有意な差が認められたことを報告している。

以上の研究報告によっても明らかのように、海外での語学研修は言語的な運用能力の向上に有効なだけで

はなく、英語学習上の情意面や心的な態度にも好ましい変容が期待できる。ますます多くの若者が海外での教育研修の機会を得て、語学のみならず国際理解・異文化理解の体験を通して学ぶことができるということは実に素晴らしいことである。一方、このような若者を受け入れてくれる教育機関や関連団体の理解と協力的対応も重要であることは明白である。現在までのところ、語学研修・国際理解研修のプログラム成果(特に言語能力の伸長度)に関する調査報告に比べ、研修を受け入れてくれる研修地や研修機関のプログラム内容、カリキュラム、担当教員の管理や運営等に関する報告は少ないようだ。また、短期の研修もさることながら、比較的長期間にわたって滞在している留学生の学習様態に関する調査も少ない。留学の目的や留学を決心した背景、留学地の選択、その他多くの点について調査されるべきではなかろうか。

調査の目的

カナダ・ブリティッシュコロンビア州のコミュニティーカレッジ(ダグラスカレッジ・ニューウエストミンスター校)のESL Programで学ぶ日本からの留学生の学習様態について調査する。

研究の方法

1999年10月から予備的調査(Yamazaki 2001)をも含めて約2カ月間、カナダ・ブリティッシュコロンビア州のコミュニティーカレッジ(ダグラスカレッジ・ニューウエストミンスター校)のESL Programで学ぶ日本からの留学生(103名)を対象に質問紙による調査を行った。46項目からなる質問項目のうち、本稿で用いる学習様態に関する項目は17項目でその17項目の回答結果を調査データとして因子分析を行い、学習様態に関する特性について検討する。回答者全体を対象に

* 本学英語コミュニケーション学科助教授(英語教育)

表1. <自主的な学習活動についてたずねる項目>

- 項目30: native speaker (カナダ人) の友達をつくり, 積極的に会話をする
- 項目31: 日本人とでも英語で会話をする
- 項目32: 単語ノートなどを作って単語力をつける
- 項目33: テレビやビデオを利用してヒアリングの力を伸ばす
- 項目34: 新聞や教科書以外の本・雑誌を読む
- 項目35: インターネットを積極的に利用する
- 項目36: 知らない単語を見つけたら, 後で辞書で調べる
- 項目37: 英語で日記をつける
- 項目38: TOEFL又はTOEICのスコア向上が目標の一つである
- 項目39: 普通の日常会話ができるようになりたい

<これまでの学習状況を振り返り自らの学習や学習様態についてたずねる項目>

- 項目40: カナダでの英語学習経験によって今まで以上に英語への関心が増した
- 項目41: 英語の勉強に集中できない悩みや問題がある
- 項目42: どんなことがあっても挫折しないという強い意志で留学している
- 項目43: 英語をマスターしなければならない強い動機がある
- 項目44: ESLは正規留学 (regular course受講やカナダの4年制大学入学) のため勉強している
- 項目45: 英語の学習方法について誰かにアドバイスをしてもらいたい
- 項目46: 学校 (カナダ) の先生に勉強方法のことで何回か相談した

した分析の後, 各因子の標準因子得点を算出しESL群とPost-ESL群にわけて群間の差異について言及する。即ち, 回答傾向にESL Programで学習している学生とESLを修了してアカデミックコースで学習している学生との間に学習様態に差異があるかどうかについて検討する。なお, 統計処理にはAbacus社のStatView-4.5, Microsoft社のExcel V.8.0, SPSS V.10を使用した。

結 果

本研究で用いた17の項目 (表1) に対する回答について, 自主的な学習活動に関してたずねる項目に対して「いつもそうしている」, あるいは「全くそのとおりだ」に5点, 「時々そうしている」, あるいは「そのとおりだ」には4点, 「わからない」, あるいは「どちら

表2. 各項目の評定得点の平均、標準偏差、分散

項目	平均	標準偏差	分散	項目	平均	標準偏差	分散
30	3.670	1.183	1.400	38	2.660	1.600	2.560
31	2.961	1.283	1.646	39	4.359	1.203	1.448
32	2.602	1.316	1.732	40	4.262	1.029	1.058
33	4.117	0.973	0.947	41	2.854	1.562	2.439
34	3.786	1.045	1.091	42	4.058	1.037	1.075
35	3.476	1.399	1.958	43	3.825	1.438	2.067
36	3.942	0.998	0.997	44	3.709	1.613	2.601
37	2.126	1.273	1.621	45	3.476	1.454	2.115
				46	3.136	1.578	2.491

表3. バリマクス回転後の因子負荷量

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
項目 30	-0.066	0.122	<u>0.858</u>	-0.052	0.758
項目 31	-0.262	<u>0.741</u>	0.327	-0.005	0.725
項目 32	-0.006	0.073	0.327	<u>0.822</u>	0.788
項目 34	0.291	-0.164	<u>0.558</u>	0.184	0.457
項目 35	<u>0.741</u>	-0.138	0.032	0.082	0.576
項目 36	0.08	0.004	0.135	<u>0.79</u>	0.649
項目 38	<u>0.682</u>	0.152	0.114	-0.064	0.505
項目 41	0.153	<u>0.669</u>	-0.035	0.173	0.502
項目 45	0.262	<u>0.649</u>	-0.035	0.173	0.521
項目 46	<u>0.663</u>	0.331	-0.079	0.125	0.571
説明分散	1.710	1.617	1.302	1.423	6.052
				累積説明率	0.605

表4. 各因子と項目内容

	項目	負荷量	内 容
因子I	35	0.741	インターネットを積極的に利用する
	38	0.682	TOEFL又はTOEICのスコア向上が目標の一つである
	46	0.663	学校(カナダ)の先生に勉強方法のことで何回か相談した
因子II	31	0.741	日本人とでも英語で会話をする
	41	0.669	英語の勉強に集中できない悩みや問題がある
	45	0.649	英語の学習方法について誰かにアドバイスをしてもらいたい
因子III	30	0.858	native speaker(カナダ人)の友達をつくり、積極的に会話をする
	34	0.511	新聞や教科書以外の本・雑誌を読む
因子IV	32	0.822	単語ノートなどを作って単語力をつける
	36	0.79	知らない単語を見つけたら、後で辞書で調べる

とも言えない」に3点、「めったにしない」、あるいは「どちらかと言えばちがう」に2点、「したことがない」、あるいは「全く違う」に1点を与えて得点化した。また、これまでの学習状況を振り返って自分のあてはまるような学習や学習様態として、同様に肯定的回答の最大を5点、以下4点、3点、2点、1点と得点化した。

ちなみに上記17項目の信頼度係数(alpha)は.672であった。各項目の得点の平均、標準偏差および分散は表2のとおりである。

表2より33, 37, 39, 40, 42, 43, 44の項目は至度の点か

ら不良なデータと判断し、因子分析には持ち込まなかった。共通性の初期値を1として主成分分析法により因子を抽出した。その結果、4因子解を適当と判断した。このとき4因子の累積説明率は60.5%であった。バリマクス回転後の各項目の因子負荷量を表3に示す。

表3から因子負荷量の絶対値0.5以上を示す項目の内容を参考に各因子を解釈する。その結果、負荷量の多い項目が表4のように示される。

因子Iには「自主的な学習活動」を尋ねる項目より、「インターネットを積極的に利用する」と「TOEFL又

はTOEICのスコア向上が目標の一つである」の二つの項目に大きな負荷量が見られる。留学生活の中で一般的な情報や email の利用はもとより、カナダやバンクーバー周辺の事情に関する情報、日本やカナダ国内の就職や進学の情報入手するには必須のツールである。調査の対象になった学生の大部分が学ぶダグラスカレッジでも本格的なコンピュータ利用教育が展開され、週末も勿論、休暇期間中でも学生は自由に学内のコンピュータ室に出入りできる。また、調査を行った1999年には既にコンピュータ端末でのTOEFL試験が実施されていた。項目38の高い負荷量から見て、留学によって得られる能力を客観的に証明できるものとしてのTOEFL、TOEICのスコア向上に大きな関心が向けられていることは当然であろう。また、ダグラスカレッジではTOEFLのスコアが560（コンピュータ利用の場合は220）以上ないと一般のプログラムを受講することはできない。言い換えれば、ESL Programで英語を学ぶ学生にとってコミュニティーカレッジなどのAAの学位や他の4年制大学等に進学ないし編入する場合に越えなければならない一つのハードルである。このように目標としての英語運用能力の向上をめざし必要な情報を収集するためにインターネットを利用したり、担当の教員に学習のことで相談したいという気持ちが関連している。このような態度を「英語学習に取り組む積極性」の表れとし、「学習を支える資格志向」を因子名とした。

因子Ⅱの場合はどうか。「日本人とでも英語で会話をする」（項目31：英語力の向上、特に日本語をできるだけ使わないで英語に接するという積極的な態度や強い意志）に大きな負荷量が見られる。一方、「英語の勉強に集中できない悩みや問題がある」（項目41）や「英語の学習方法について誰かにアドバイスをしてもらいたい」（項目45）にもかなりの負荷量があることから、学習に対する積極性と強い意志の表れと同時に、英語学習や留学生活になんらかのいきづまりや不安感などが感じられているようすがうかがえる。因子Ⅰで見られた積極的な態度とは若干異なっているようだ。日本からの留学生の数はひじょうに多い。入学して日の浅い学生のほとんど全員は英語で通していたが、在学期間が長そうな学生達は日本語を使っていた。「慣れてくるとどうしても日本語になってしまう」というのが本音だ。そんななかでも他の学生から「日本人みたいだけど日本語を話しているところを見たことがない」と言われて一目おかれているような学生にも少数ではあるが何人かに出会い、幾度か話をする機会

を持った。そのような学生がインタビューの中で話してくれた彼等の胸の内はやはり複雑なものがあるようだ。インタビューの中で得た印象では、「日本人とでも英語で話す」という自主的な学習態度と、少数派になっても「英語で通す」という態度には明確な違いがあるように思われた。実際には大部分が日本語を使っていることが明らかなのに、自主的な学習態度の名目的な目標としては「日本人にも英語で話す」あるいは「話した時期もあったし、そうしたほうが良い」と感じるものの複雑さは、項目41、項目45に表れる「不安感」と微妙な結びつきを示す。英語学習に対する一般論としての積極的な態度と、一生懸命やっているのになかなか上手く行かない「焦り」や「不安」が同居しているようにも思える。よって、因子Ⅱには「積極的な態度と不安感の混在」という名を付けることにした。

因子Ⅲでは、「native speaker（カナダ人）の友達をつくり、積極的に会話をする」（項目30・積極的にコミュニケーションを図りカナダ人の文化を理解しようとする態度）と、「新聞や教科書以外の本・雑誌を読む」（項目34・自主的にオーセンティックな教材を求める態度）に大きな負荷がある。項目31の「日本人とでも英語で会話をする」と比べると回答数は項目30の方が多し。カナダ人とのコミュニケーションで英語を使うのは自然であり、これを以て積極的な態度の表れと決めつけるは危険かもしれないが、英語学習と同時に異文化に対する積極的な姿勢が感じられる点において項目31の示すものと若干の違いがあるように思われる。項目34の示すオーセンティック（真正性の高い）な教材（英語）に対する関心は、このような異文化理解の態度と一定の関連を持っているとも考えられる。カナダ文化に対する理解しようとする積極性と、自発的に新聞や雑誌を読むことで英語力（読解）の向上を図ろうとする姿勢に、真正性の高いメディアを学習の対象として求める気持ちが感じられる。この因子Ⅲには「オーセンティックな英語文化志向」という名前を付ける。

最後に因子Ⅳであるが、「単語ノートなどを作って単語力をつける」（項目32・語彙力の向上が英語力の向上につながる）と、「知らない単語を見つけたら、後で辞書で調べる」（項目36・語彙習得を含めた英語に対する精微な学習態度）にひじょうに大きな負荷量が見られる。いずれも語彙力の向上を重要視するものであり、「単語ノート」、「辞書利用」から感じ取られる細やかな学習態度がこの因子の中心的特徴であろう。よって、因子Ⅳには「語彙力向上志向」という名

前を付ける。

以上四つの因子を一覧すると以下のようになる。

因子Ⅰ：「学習を支える資格志向」

因子Ⅱ：「積極的な態度と不安感の混在」

因子Ⅲ：「オーセンティックな英語文化志向」

因子Ⅳ：「語彙力向上志向」

考 察

これらの因子の表す特徴の共通点は、積極的な学習態度と留学に対する強い期待感、さらには留学生活で感じる不安感や悩みであろう。希望と不安感の混在といえよう。留学したからには、なにか具体的な証が欲しい。英語のプログラムを修了した修了証書だけでは心許ない。TOEFL, TOEICはその表れである。四年制大学に編入して学位取得を目指すのも一考である。まずは英語運用能力ということで学習に勤しむ。ダグラスカレッジのESL Programでは学内日本語厳禁である。日の浅いうちは学生同士でも英語を使っている。次のセメスターがはじまる頃には仲の良い友達同士では自然に日本語になってしまうらしい。気心が知れると英語で会話をするのは抵抗を感じるのだろう。しかし、肝心の英語の勉強のほうはなかなか捗らない。焦りと不安が顔を出す。比較的短期間で英語を修めた学生に聞くと自分なりに身につけた学習法と、それ以上にはっきりした方針や主義を貫くことが大切なようだ。共通しているのは厳しい競争意識である。彼等の中には日本人の学生とのつきあいはあるものの私生活では想像以上に十分な英語のインプットを確保している。そのような学習の進んでいる学生にも先々の不安はつきないようだ。帰国後の就職のことや、ダグラスカレッジのあとのトランスファーのこと、生活を支える経済事情のこと、等々。積極的な学習態度の裏にはさまざま要因からの不安感が存在することは明らかである。一方、学習の対象になっている英語がどの程度マスターできているかということを自己評価して貰うと、意外と不満足の声が高い。ESL Programも修了しアカデミックコースで学ぶ学生にインタビューした際に意外な答えが返ってきた。一般のカナダ人学生と混じって教室で勉強すること自体は大して困難を感じないが、カナダ人の学生のジョークが理解できないとか、自然な会話の流れについていけないと感じるときがあると言う。ダグラスカレッジでの勉強とは別にダウンタウンの英会話学校へ通っているという学生も少なくない

のである。このあたりを見るとPost-ESLの学生の英語（会話）能力は十分でないということになる。簡単に言えば、ESL Programで修得する運用能力は、本来アカデミックコースでの学習のためのものである。99年当時に出会ったダグラスカレッジきっての優等生で、奨学金まで獲得していた兵庫県出身の学生は、「ブリティッシュコロンビア大学の修士課程に今すぐでも入れる」とアドバイザーに奨められているのに、「日常会話能力の不十分さが気になって大学院進学は考えられない」と話してくれた。彼以外の学生からも同様のことをインタビューの際に聞いた。ライバルは日本の学生ではなく、授業の成績だけではなく英語力においてもカナダ人の学生だと豪語する学生もいて、彼のその意気込みや迫力は凄まじいものがあった。このような学生の気持ちはESL Programの学生のそれと同じとは言えないような気もするが、レベルこそ違い、限りなくオーセンティックな英語を求める気持ちの強さに少々驚いた。カナダは中国系やインド系、中近東やバルカン諸国からの移民の多い国である。それぞれ訛りの強い英語をよく耳にするところだ。しかし、日本からの留学生たちのいう「native speaker（カナダ人）」の英語はそのような英語ではないことは確かだ。おそらく彼等の考えるカナダ文化は、やや保守的な白人中心のそれに近いような気がする。いずれにせよ、質問項目に文法に関する項目や、writingに関する項目、その他言語技能に関する項目を十分に設けていなかったのも、語彙力だけが重要視されていると片づけるわけにはいかないが、オーセンティックな英語を求めて学習を進める中で彼等が最も重要と感じているのは語彙力のようなものである。

因子得点に見るESL群とPost-ESL群の比較（結果と考察）：

次に各因子の標準因子得点を算出してESL群とPost-ESL群にわけ、各群間の因子得点の平均値の比較を行った。表5はESL群とPost-ESL群の因子得点の平均値と標準偏差を示す。

分散分析の結果、因子Ⅰ及び因子Ⅱの因子得点には群間の有意差が検出されたが、因子Ⅲ及び因子Ⅳでは有意差はみられなかった。因子Ⅰの「学習を支える資格志向」と、因子Ⅱの「積極的な態度と不安感の混在」では、ESL群の平均値がPost-ESL群の平均値よりも大きい。ESL群の学生のほとんどはPost-ESL群の学生よりも滞在期間や学習期間が短い（各々の平均値の差は有意であった）。また、当然のことながらESLの学生は

表 5. ESL 群と Post-ESL 群の因子得点の平均と標準偏差

		ESL 群 (N=62)	Post-ESL 群(N=41)
因子 I	Mean	.400	-.605
	SD	.855	.933
		F(1,101)=31.679 p<.0001	
因子 II	Mean	.182	-.275
	SD	-.839	1.169
		F(1,101)=5.335 p<0.5	
因子 III	Mean	.002	-.002
	SD	.954	1.086
		F(1,101)=.0003 p=.9842 NS	
因子 IV	Mean	.002	-.002
	SD	.954	1.180
		F(1,101)=.013 p=.9097 NS	

主に英語運用能力の習得が目標であると意識されているのに対して、Post-ESL群は既にESLの課程は修了し、次のステップであるアカデミックコースで学習している。従って自ずと「資格志向」の程度や強度にESL群と差が出るはずである。特にカナダの多くの大学ではコミュニティーカレッジや他の4年制大学からトランスファー（編入）する場合、TOEFLのスコアの提出は不要である。従ってPost-ESL群の学生の意識の中でTOEFLのスコア向上の必要性は減少する。ところがESL群の学生の場合は学習期間の短さから（平均は1年）、留学の成果としてのTOEFL、TOEICの得点に対する関心が高まる。ESLのプログラム修了後に、あるいはその途中で帰国する場合などには、習得した能力や留学の成果を示す証としてのTOEFL、TOEICのスコアには大いに関心を持たれる。

因子Ⅱの場合、表5の示すように有意差が検出されている。すなわちESL群の方がPost-ESL群よりも平均値が大きい。項目別に見ると項目31「日本人とでも英語で会話をする」、項目41「英語の勉強に集中できない悩みや問題がある」では群間の有意差は見られないのに対し、項目45「英語の学習方法について誰かにアドバイスをしてもらいたい」ではESL群のほうが平均値は有意に大きかった(F(1,101)=18.194 p<.0001)。このことはESLの学生のほうがPost-ESLの学生よりも英語の学習方法についてアドバイスを必要としていることがうかがえる。ESL群の学生よりはPost-ESL群の学生のほうがカナダ、及びダグラスカレッジでの滞在期

間は長い。学習経験や期間、さらには現在目標にしていることがらによって「アドバイスの必要度や内容」に差が出てくることも当然考えられる。

因子Ⅲや因子Ⅳでは因子得点の平均値に有意差は見られなかった。「オーセンティックな英語文化志向」と「語彙力向上志向」において、いずれのグループが一方のグループよりも関心や意識の面で強いとはいえず、むしろ調査の対象になった回答者（学生）全体に見られる傾向であると言えよう。

まとめ

カナダ・ブリティッシュコロンビア州のコミュニティーカレッジを選んだ留学生たちの主要な関心は英語力の向上であろう。その証としてTOEFL、TOEICのスコアにも関心が向く。これは一般の大学生についても言えることである。しかしながら、このような一般的とも言える傾向の中に、ESL群の学生とPost-ESL群の学生との間に一定の差が見られた。

今回の調査に協力してくれた留学生の諸君は、総じて英語学習やそれぞれの学科の学習に積極的に取り組んでいると言える。おそらくその積極的態度がともすると心の中に不安の影や、焦り、悩みをもたらす原因の一つになっているのかもしれない。一生懸命になればなるほど、不安や焦りは増加するのだろうか。不安感や焦燥感がつよいがために、ことさら積極的に勉強に取り組む、あるいは取り組まなければならないと感

じているのだろうか。多くの留学生の心の中にある不安の大部分は、海外で一人暮らしをしていることから起因するものと、学校での授業、成績、進路などから起因するものに大別できそうである。しかし留学生自身がその事に気づいているかどうかは不明である。英語学習にのみとどまらず、両親をはじめとする関係者との人間関係や経済的な支援の状況、就職を含む留学後の進路、恋愛、健康等々、数多くの問題や悩みがある。専門家の援助が至急必要と思われる学生にも出会った。

英語の真正性に関心を持つ態度や、語彙学習の重要性との関連性がESL, Post-ESLの別なく強く意識されていることは興味深い。学習者の意識や立場から判断される学習言語の真正性に関する研究についても今後深めなければならない

References

Douglas College Calendar 99/00, 1999. Produced by the

Communications & Marketing Office and the Registrar's Office.

Iwakiri, M. 1993. Effects of a Study Abroad Program in the English Development of Japanese College Students. JACET Bulletin, No. 24, 41-60.

Kohro, Y. 2001. A Pilot Study of the Linguistic Impact of Study Abroad Experiences on the Writing of Japanese College ESL Learners in America. JACET Bulletin. No.33, 57-72.

Yamamoto, H. 1992. Effects of an overseas short-term, intensive English program on the Development of English Proficiency among participating students. Bulletin of Seinanjogakuin Junior College, 39, 21-30.

Yamane, S. 1985. Studying in Canada: Effects on listening comprehension. Tezukayama Kiyō, 22, 113-124.

Yamazaki, J. 2001. A Brief Report on the Preliminary Survey of Japanese ESL Students in Canada. Bulletin of Heian Jogakuin Junior College, No. 32, 7-15.